



島尾敏雄
安岡章太郎
庄野潤三
吉行淳之介
集

日本文学全集 62



日本文学全集 62 島尾敏雄 庄野潤三
安岡章太郎 吉行淳之介 集

昭和四十五年十一月一日発行

著者 島尾敏雄 庄野潤三
安岡章太郎 吉行淳之介

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 和田製本工業株式会社

島尾敏雄集 目次

島の果て

五 死の棘

夢の中で

三 島へ

月暈

三 マヤと一緒に

二〇四 八四 四三

安岡章太郎集 目次

海辺の光景

三三 雨

ガラスの靴

二九 質屋の女房

二〇八 二〇一

庄野潤三集 目次

プールサイド小景

三九 日ざかり

静物

三三 秋風と二人の男

三〇〇 二九四

道

二六

三〇〇

吉行淳之介集 目次

砂の上の植物群

三七

鳥獣虫魚

四三

驟雨

四六

年譜

四〇

人と文学

奥野健男

四七

口絵写真撮影(安岡章太郎) 村瀬博

口絵写真提供(庄野潤三) 研究社

口絵写真撮影(吉行淳之介) 野上透

島尾敏雄集

傷人だ葺も折らず
煙る灯心も消さない

島尾敏雄

島の果て

むかし、世界中が戦争をしていた頃のお話なのですが――

トエは薔薇の中に住んでいたと言ってもよかったです。と言うのは薔薇垣の葉だらけの、朽葉しきつめたお庭の中に、母屋と離れてぼつんとトエの部屋がありました。ここカゲロウ島では薔薇の花が年がら年中咲きました。その部屋の廻りは木の廊下がめぐっていて、ひとところだけが母屋に通ずる取りはずしのできる橋廊下になっていました。夜になると三方に紙の障子をたためぐらして蠟燭をともしました。そして木の戸をひきしめて戸締りを厳重にすることもなくてすんでいたのです。

トエの一日の仕事というのは部落の子供達と遊ぶことでした。部落の子供という子供がみんなはだしてトエの庭に集ってくるのです。トエは子供達に歌を教えました。

浜千鳥、千鳥よ

何故お前は泣きますか――

トエがいくつになるのか誰も知らなかったのです。たいへん若く見えました。小鳥のように円い頭をしてほかの娘たちよりいくらか大きなからだつきをしていました。娘らしく太っていました。それでも体重はむやみに軽かったです。顔だちとは言えは、ほかの島娘たちとそう違って、いるようにも思われなかったのですが、ただ口もとに特徴がありました。ほほえむと、口もとは横に細長くきりりとしました。部落の人たちは大人でも子供でもトエは自分たちと人間が違うのだと考えている人が多かったのです。それは昔からトエの家の人たちはそういうふうな、思われてきたので、ほかには別に理由はなかったのですが、不思議なこととも思われずにトエは部落全体のおかげで毎日遊んでいくらして行くことができましたが、二、三の年寄りたちは、トエがこの部落の生れの者でないことを知って居りました。

その頃、隣り部落のシヨハーテに軍隊が駐屯してききました。そのためにトエのいる部落にも何となくあわただしい空気が流れ、世界の戦争がこのカゲロウ島近くまで覆いかぶさってくる不吉な予感に人々はおびえました。一体何人ぐらいの軍人がやってきてどんなことをするのだろうか。部落にとってめいわくなことが起りはしないだろうか。頭目という人はどんなひとだろう。あれこれと部落びとは心配

をしました。

だが、やがていろいろなことが分りました。ショハーテの軍人は百八十一人で、その頭目の若い中尉は、まるでひるあんどんみたいな人であること。むしろ副頭目の隼人と
いう少尉さんの方が、男ざかりではあるし経験もつみ万事で
きばきとして人との応待も威厳があつて軍人らしい。百
八十人の部下は——いや、隼人少尉を除いて百七十九人の
部下は、若い頭目に同情はしているけれども、副頭目のき
びきびした命令にすっかり服従しているらしい、などとい
うことどもでありました。だから頭目の一日の仕事という
のは、自分の領分内の、チタン、サガシバマ、タガンマ、
スングバラ、それから対岸のウジレハマなどを廻り歩いて
十二の洞窟と八つの合掌造りの兵舎の様子を見てさえいれ
ばそれでこと足りするのさ、という評判でありました。

朔中尉——と、そう頭目は呼ばれていたのですが、背は
高いがやせていると部落では噂をされました。それに引き
かえ隼人少尉はずんぐりしていて真赤な丈夫そうな顔付を
していると言われました。

副頭目は心の中で朔中尉をそんなに好きではなかったの
ですが、表向き二人は仲良くやっているように見えました。
で、お酒を飲んだりしたときは、袋の中の錐のように隼人
少尉の言葉はちくりちくりと朔中尉をつつきました。時と
するどぐでんぐでんに酔っぱらったふりをして朔中尉にあ
てつけの、乱暴をすることもありましたが、朔中尉は何も

言おうとしませんでした。だがら隼人少尉は頭目は何を考
えているのだろうと思ひました。実際の所、朔中尉が何を
考えているのかちよつと誰にも分らなかつたのです。

戦雲は拡がってきました。敵の飛行機がカゲロウ島の上
空にもぼつぼつ現われるようになりました。

或る日非常に悪い情報がはいりました。——カゲロウ島
に大空襲がある。戦局は急転直下の変貌を示した。敵は新
しい作戦を計画しようだ。大空襲のあとに、敵は島に上
つてくるだろう——

この情報は朔中尉の軍隊にもてき面にひびいてきました。
空襲にそなえて洞窟の前に爆弾の被害をさける柵を構築せ
よという命令がきたのです。

その命令を朔中尉が受取つたのは夕方方の食事もすんで、
たそがれ行くはまべには、もう寝るばかりの一日の中で一
番長くてのんびりした休憩の、時の移り行くのを惜しむ姿
がちらほらしていた時でした。ハモニカを吹いている若者
もいました。どうして情報の急変などということが考えら
れましよう。

だが、小高い本部の木小屋でそのような夕ぐれに身をま
かせていた頭目は隼人少尉を呼んでこう言ひました。

「隼人少尉、この作業は徹夜をすることになつても止むを
得ん。今からかかりましよう」

それをきいて隼人少尉はぼつぼつと闘志のみなぎり来る

のを感じました。やがて隼人少尉のきびきびした作業の区処により十二の洞窟の前にはランタンランタンのゆらめくあかりが見え、丸太のぶつかり合う威勢のよいひびきがきかれましました。この洞窟の中には実はたいへんなものがかくされてありました。それはいよいよ敵がカゲロウ島に上ってくるときにだけ使われるもので、その色々のことについては頭目と百七十九人の中から選ばれた五十一人の者だけしか知らないことでした。

朔中尉は胸さわぎがしました。運命の日があまりにあっけなく眼の前にやってきたことに甚だ不満はなはだのようでありました。しかし、一方これから起るかもしれない未知の冒険にふるい立つ心も湧いてきました。ただどうしても心にかかることが一つだけあったのです。それはその日がすっかり暮れてしまったら、シヨハーテの部落の督督基トクトクキさんの家を訪ねる約束をしていたことでした。それは――

督督基さんのところのヨチという女の子に、若い頭目は心ひかれたのでした。というのには、中尉さんがヨチを背負ってやったときに、やわらかい二本の足と中尉さんの肩をそつと掴んでいるヨチの可愛い掌と、そしてそつと中尉の頬をくすぐったヨチの息遣いが忘れられなかったのです。ヨチは中尉さんの胸までも背丈はありませんでした。前の日中尉さんがシヨハーテの部落うちを通ったときに、赤ん坊の督四をねんねこで負ぶってふくらんだヨチがいきをはず

ませて、

「中尉さん中尉さんシヨハーテの中尉さん」と呼びました。中尉は立止って督ヨチの赤いくちもとをじつと見ました。まつげが頬にかけを作る位長いのです。おむすびのように大きな黒い頭のヨチが思いきって言いました。背中背中の督四をあやすので始終からだをゆすりながら。

「ガジマルの木の下にケンムンが出てこわいのです」

ねんねこが短く二本の細いすねと素足のくるぶしがいたいたしく見えました。

「こわいから遊びにいらっしやいね、ね」

「あした又」

朔中尉はぼつんと歩きながら島ことばで答えて、しばらく行きすぎてからふり向いてつけ足しました。

「すつかり夜になってから」(それまでにヨチのために棒飴をつくらせて――)

――その約束を思い出したのです。ひょっとしたら予感にたがわず明日あたりからカゲロウ島は激烈な戦闘の様相を帯びてくるかも知れない。カゲロウ島そのものがこの地球の上から無くなってしまうようなそんなことはおそらくないだろうし、又此処ここの島びとたちはいのちのふかしぎから島の草木と共に生きのびるかも知れない。ああ、島に駐屯している軍人たちでさえもその幾人かは颯風一過のあとでこおろぎの音色に泣くものもあるだろう。しかし朔中尉と五十一人にはそのことは或る命令のために考えてみるこ

とさえせつない、望まれないことでした。

中尉さんは心の中で泣きました。ヨチとの約束を守らなければいけない。一途にそう思ったのです。

隼人少尉と百七十九人はそれぞれの仕事をして居りました。いつのまにか夜空が険悪になって雲の流れる気配が地上にまで伝わりました。風さえ出てきたようです。

中尉さんは木小屋の本部の頭目の部屋にはいると従卒を呼びました。

「小城よ棒飴を持って俺に続いてきておくれ」

小城は急いで棒飴を風呂敷に包むと、はまべに下りて行って小舟を用意しました。中尉は黙って黒々と小舟に乗り移ると、小城は櫂かで急がしく漕ぎはじめました。櫂の音は仕事を監督していた隼人少尉の耳にはいりました。少尉は闇をすかして入江の中を見ると、シヨハーテ部落の方にへさきに向けた小舟に頭目らしい人影と従卒のそれを見たのでした。風が出てへさきはぐるぐる廻りました。でもほとんど小舟が目的の岸につくと中尉さんは岩の上にとび上り、小城従卒から棒飴の包みを受取ると闇の中に部落の方へと消え去りました。小城は杙くわに小舟をつなぎ腰をおろし頬杖をついて自分の仲間が仕事をしている対岸の方をぼんやり眺めました。ランタンの灯がみぎわで伸びたり縮んだりしているのを見てみると、子供のとき泣き笑いでみた街の灯が十字架のように伸び縮みしたことごっちゃになって

いました。黒い雲が一ぱい出て来たようでありました。

中尉さんのおとのうた家は、居間と台所の二間しかない極く貧しい掘建小屋のような家でした。それなのに家の中には沢山の子供が居りました。あるじの督基さんはここ一箇月ばかり前にウ島のクニヤに行つて未だ帰つてこないということでした。おかみさんのウイノさんはこんなことを言いました。

「中尉さんこんなに沢山の子供をちょっと見て下さい。むかしちいさこべのすがるはきつとこんなふうでしたしやうね」

中尉さんは笑いました。ほんとに、督熊トウグマ、ヨチ、督二郎トウジロウ、リエ、督三トウサンそれにややこの督四、こんなに沢山いる——小さなヨチはその中でお姉さんのように振舞っていました。もう寝ていた弟の督二郎や督三も妹リエもにこにこ笑いながら起きてきました。ヨチはお姉さん顔をしてお行儀をたしなめたりしました。牛乳のような匂いにみちてこんなに沢山の子供がいるのに朔中尉には何故かとても寂しく感じられてなりません。それは胸がしめつけられるような寂しさでありました。もし、その日が来たときにはこのやわらかな子供たちはどんなことになってしまふのだろう。この考えは居ても立ってもいられないものでした。

「この島に敵が上ってきたらこの子供たちをどうしましやう。中尉さん敵は上ってくるのですか」

ウイノさんはこうききました。

「こんな小さな島に来るのですか」

中尉さんはごまかしました。そしてそんなふうにしらばくれていることにがまんができなくなりおいとま乞いをしました。敵が上陸して来そうだからこそお別れにきたのはありませんか。子供たちはおみやげの棒飴をおいしそうに食べながら膝小僧をそろえてあがり口に並びました。

「中尉さん、さようなら、シヨハーテの中尉さん」

中尉さんは子供たちの手をにぎりました。おお、やわらかな手、世の中にこんなにやわらかいものがあつたのだから。ヨチはおませな口調で、

「ね、中尉さん。トエが、トエがお魚をたくさんたくさん買いましたから、シヨハーテの中尉さんに、いっしょに食べにおいでって」いきをはずませて言いました。

朔中尉の前にもうこの世のことは何もありませんでした。追っつけ命令が下り、あの洞窟の中のものゝ海に浮べて打乗り、敵の船に体当りにぶつかって行くこの世とも思われぬ非情な自分と五十一人それぞれふう変りな運命の姿ばかりが先立つのです。小舟のある所まで行くのに足がふるえました。がっくりと小舟に乗ると、小城は岸からこぎ放しました。折しもせききれなかつたもののようにさあーと水の面をたたくものがありました。それはあたりがしぐれてきたのでした。水面にはぼつぼつぼつ一ばいあばたができました。黙って二人とも濡れました。ウイノさんがくれたビーナツを小城のポケットにいれてやると小城は

黙って頭を下げました。仕事はもう終ってしまつたらしく、チタン、サガシバマ、タガンマ、スングバラ、ウジレハマはみんな物音もなく雨足のみ蚕しぐれのようにふりそいでいました。

次の日は、一日中雨でした。

そしてこの島への危険は通りすぎたようでありました。

敵はずっと東の方の小島に新しい作戦をはじめ出しました。雨勢はだんだんつってきて、車軸を流すようになったので、午後はみんな休みました。中尉さんはつかれたので自分の部屋で寝ました。板敷の床下でヒメアマガエルのなぐのをきいているうちにすっかり眠ってしまいました。

……夢の中で隣の部屋の人声がやかましくて仕方がない。そんな傍若無人な奴はとても許して置けないと自分でひどくいららしてゐるなと思つてゐると眼が覚めました。部屋はまっくらでした。またいつのまにか夜のとばりに覆われて、雨は相変らず降つていました。そして隣室では実際に人声がしていたのです。きくともなくきいてゐると次のような言葉が耳にはいりました。

いづどんな命令が来るかも分らないのに……それにみんなが大切な仕事……そんなふうだから……四号の洞窟……眠つてはいられない……

朔中尉にはその意味がすぐびんと来たのです。隼人少尉

の蛇のように冷く沈んだ眼の色を思い出してびくりとどき起きました。

中尉はわざと足音高く隣の部屋には行って行きました。

隣の部屋ではランプを三つともして単人少尉が部下の主だった者の二三人をあつめてお酒を飲んでいました。まっ赤な顔をランプの灯にかてかどと光らせて、

「これはこれは朔中尉どの」

酔った調子で、でもいくらかてれくさそうにこう言いました。

「おやかましくて、おやすみになってはいられませんまい」

二三人の主だった部下は一寸困って酔がさめたような様子をしました。が、朔中尉は立ったままにこりともしないと言いました。

「単人少尉、洞窟四号の話は本当なの？」

「さあ、本当にもなにも、御覧になれば分ることでさあ……なあ伊集院」

と一人の部下の方に赤い顔を持って行つたのです。

「そう」

中尉さんはそう言うのと静かにその部屋を出て、自分の部屋に戻り、紺のレインコートを釘からはずし、それを着ながら雨の中に出て行きました。

しばらくして、雨の中を当番が、洞窟四号の作業受持の者集合の命令を伝えて歩きました。それをきいた単人少尉はふと、どきりとした顔付をしました。が、にが笑いをしな

がら右の手でぶると顔をなでると、

「やれ乃公はおやすみ遊ばすか。伊集院お前たちも寝たらどうだ。それとも洞窟四号の受持かな」

という、もう寝台の上からだを横たえていました。

洞窟四号の前には十五人ばかりがしぶしぶ集って来ました。折角積みあげた土囊は無残にも崩れてしまっていました。そこは地面がやわらかなのと山の地下水の道筋になっていたらしく小さな川のように水が湧き流れ出て、すっかり土を洗い流してしまっているのです。崩れた土囊を見ると中尉はそれが醜い自分の姿のように思えました。集った者は口の中でぶつぶつ言うことをやめませんでした。雨水は襟といわず袖といわず、ひやひや気持悪く肌の中に流れこんできました。

「先任の者は集つた者の数をあたれ」

そう中尉が言う、誰かが小さな声で、ちえっ仕事にならねえと言いました。中尉はそれをきくとぐっと胸につかえました。突然に何とも知れぬ大きな悲しみの底につき落されました。やがてそれはからだじゅう真赤になるような恥ずかしさに変りました。と勃然と憤怒が湧き上ってきました。

「待てっ！」

自分でもびっくりする程すき透つた大きな声が出ました。

「お前たちは……お前たちは只今即刻兵舎に帰ってやすんでよろしい。ぬくぬくとやすんでいてよろしい」

部落の方にまで聞こえるように大きな声でした。とっさのことに十五名ばかりの者はそこを動きませんでした。じつとして動かずに雨に打たれて中尉さんの次の言葉を待ちました。すると、中尉さんの顔にはさっと殺気が走ったようでありました。が次の瞬間にはそれはくしゃくしゃに崩れて泣顔になり持っていた竹鞭たけむちを振り上げて叫びました。「わかったらやすんでよろしい。よろしいと言ったらよろしいのだ」

いつにない頭目の劍幕けんまくに十五人ばかりの者は白けきった気持で各々の兵舎に帰って行きました。そのあとに残った中尉さんはたったひとりでその仕事をやり始めたのです。始めに水の流れる一帯を掘り起しました。それはぐんぐん破壊して行く仕事でした。そのみぞにはパラスをつめました。そうして一人で持てばたいへん重い土囊を一つずつ積んで行きました。その仕事がかかり終る頃には、夜は深更に及びいつか雨はやんで居りました。雲の割れ目から月が出て居りました。その夜は十六夜の月でありました。この哀れな中尉さんの頭は熱病のような交響楽で一ぱいでありました。腰をさすって見上げた雲の中のお月様はとても険し気でありました。彼は自分の運命のようなものを感じないわけにはいかなかったのです。その夜も生きていたのです。そうして敵がいよいよ鳥島やカゲロウ島めがけてやって来るのはきつとお月夜の晩にちがいない、と彼は突然の啓示のようなものに打たれました。彼は寝ようと思ひ、

本部の木小屋の方にやって来る途中で峠へのぼる道の分れている所に出ました。(トエが、お魚沢山沢山買いましたから……) その峠は小さな峠でそれを越すとトエの部落は眼の下に見えるはずでした。つと誘われるように中尉さんは峠への道を選んでおりました。彼がシヨハーテに駐屯するようになるや否や誰からともなく隣部落のトエのことは耳にはいつてきて、その部落にトエが居るということは既にさだめごのような気持になっていたのです。しかし中尉さんは未だ一べんもトエを見たことはなかったのです。峠に出る途中には人間のような声で鳴く蛙が一匹居りました。

峠には小さな箱小屋が立っていて中尉さんの部下が寝ずの番をして居りました。

「頭目、峠の上もまたここから見渡すことのできる眼路のかぎりあやしげなるもの無し、又けたいな物音もきこえぬようであります。雨は〇〇三〇に停止しました」

自分の頭目の姿を認めた寝ずの番はこう言いました。中尉さんは黙って頷きました。眼の下には海の色が月光で青冷めて輝いていました。部落はもう少し山の鼻を廻らないと見えないのです。中尉さんが峠の向う側に降りて行く様子を察すると寝ずの番は尋ねました。

「頭目どちらに」

「山の端の向うの青白い月夜の部落には真珠を飲んだつめたい魚がまな板の上に死んだふりをして横たわっているの

だ。私は是非ともその様子を見届けて来なければならぬ。」

頭目は氣どつてこんなふうな答を与えました。

山の端を廻った所には、大きなガジマルの樹が不気味な沢山の手をひろげて道に覆いかぶさつて居りました。この樹は悪魔の樹なのです。ヨチのおそろしがった細いしつこい声がかきこえるような氣がしました。その下を走るように通り過ぎると、トエの部落が摺鉢の底のように肩をよせ合つて寝ていたのでした。その部落のたたずまいは朔中尉の心を深くとらえました。朔中尉は生れて二十八年の間にこんな印象深い夜の部落を見たことはないような氣になりました。そしてこの後ともこの部落の真昼の有様を知ることにはなかつたのでした。——まるですつかり夜の部落でありました。人家はかなり沢山あるのに、部落の道を通う人影はひとつもありませんでした。人家の中でひとの氣配がしているにもかかわらず、あかりは少しももれてきませんでした。部落の中はすべて、朔中尉のひとり歩きのためにつくられていようでありました。月かげで、ものなべては青白く、もののかたちは黒々と区切りがついていました。それに中尉さんが部落の路地にふみこむと何とも言いようのない芳香に包まれてしまいました。たとえてみるなら、全体の調子は甘いのですが、それは橘の実のすっぱさで程よくばかされていきました。さき程の雨で部落はすつかりしめりわたりその匂いはむせるようでありました。部落うち

には到る処古びた大木があって、ひげのように、長い沢山の根や茎を垂らしているのです。この大木たちはお互いに肩を奇妙なふうにも組み合せて部落を包みこんでいました。名知れぬ花が夜だけそつとその蕾を開くとさえ言われていました。

中尉さんは何故かこっそり足音をしのばせて、ひとひとり居ない月夜の部落を歩いているのです。そして自分の足音をきくことに心ときめかせて、とある中庭にまぎれこんだのです。中尉さんを導いたのは障子越しにゆらゆらゆらめいている蠟燭のあかりでありました。あそこだけにどうしてあかりがついているのだらう。こんな夜更けに——そう思いながら中尉さんは薔薇垣をぐるりと廻つて庭の奥に足をふみ入ると、庭一ぱいの腐った朽葉が雨水にしめつて眼のように光っていました。朽葉の眼は幾枚も重つていて中尉さんが歩くとしめっぽい音をたてました。三方に紙の障子をたてめぐらしたその部屋のスきまから覗いてみたら、豪華な机の上にお魚の御馳走が一皿だけのっかいていて、銀製の燭台の蠟燭が大きくゆらめいているのが見えるばかり、人かげはありませんでした。もっとよく見るために廊下に手をつこうとしてびっくりしました。そこに何か寝そべています。そして百合の蕊の匂いがしたような氣がしました。ワンピースの簡単な着た娘がひとり宿無し犬ころのように寝ていたのでした。中尉さんは、そうだとエだと思いました。中尉さんは手のひらの中にはいって

しまうような小さな懐中電灯を出してトエの顔を照らししました。大きな丸い顔にびっくりしました。頬の辺にうっすらと雀斑のあるのがはっきり写し出されました。トエはまぶしそうに眼をばちばちさせると右手で中尉さんをぶつようなしぐさをしてにっこり笑いました。それは口もとが横に細長くきりりとしまる特徴のある微笑でした。そして上半身を起し裾のあたりをおさえて

「お月様かと思ったの」

と言いました。

「ごめんなさい。でも眠っていたのではありませんわ」

そうして、つと立ち上るとばねのような歩き方をして障子を開け放ち、中尉さんを招じ入れました。蠟燭がトエの姿の向うになるとトエのからだがお通^{とおと}って見えしました。燃え尽きようとする蠟燭を新しいそれに替えるために、美濃紙で囲った銀の燭台を一寸覗いたときにトエの顔は紅色のネガになって輝きました。燭台をまんなかにして中尉さんとトエは少しななめになって坐り、冷くなったお魚の御馳走を黙って眺めていました。中尉さんはお魚はあんまり好きではありませんでした。

「トエ」

ぼつんと中尉さんが呼びますと、

「え」

それまで眼を落していたトエは中尉さんの眼を見ました。そして彼女の運命をよみとったのです。

「私は誰ですか」

「シヨハーテの中尉さんです」

「あなたは誰なの」

「トエなのです」

「お魚はトエが食べてしまいなさい」

トエは笑いました。トエは娘らしく太っていました。いたずら盛りの小娘のように頑丈そうでした。ただ腫がいくらかかなめを見ていたよりな気でありました。その腫を見たときに中尉さんは自分が囚われの身になってしまったことを知りました。

やがて、にぎやかな羽子板星が東の空に見え初めると、あけがたの金星が対岸ウ島のキャンマ山の頂に輝き出すのにも間もないことが分るのでした。

副頭目の準人少尉をはじめ部下が寝静まった頃おいになると朝中尉は峠への道を歩いていました。そしてその途中では必ずあの人間のような声を出す一匹の蛙におびやかされました。峠に立った寝ずの番の通るときはたいへんつらい思いをしました。だがウ島のキャンマ山に金星が輝き出す頃には頭目の部屋は中尉さんの気配で満たされました。しかし、ひるあんどんの頭目・中尉さんの深夜の行動は寝ずの当番たちの口から隊全体に広がってしまいました。敵の東の小島での作戦は終りに近付きました。カゲロウ島では夜中にも敵の飛行機がとんでくるようになりました。

或る晩、中尉さんはすが目のトエを見ていました。トエはうたいました。飛行機からあかりが見えないように廊下には木の戸をしめ燭台にはトエの着物をかぶせてくらくくしました。

遊ぶ夜のあささよ

宵ち思めば夜中

鶏歌とち思めば、よ

既夜ぬ明ける

トエがうたっている、にぶいけつたいな音が耳にまわりついてきました。それは南の方から、はじめはきこえるかきこえぬか分らぬ位の音がだんだんカゲロウ島の方に近付いてくるのです。

トエはうたをやめると中尉さんにしっかりつかまりました。

「敵が来る」

そう言つてふるえました。

「トエ、何がこわいものか」

中尉さんは笑つてみせてもトエはふるえていました。

「敵、敵が来る、みんな知ってる」

そして中尉さんの顔を穴のあくほど見つめて言いました。「行っちゃいや。みんな知ってる。洞窟の中に何がはいっているか知っているの。こわい。トエこわい。五十一人のことも知っている。トエこわい。行っちゃいやなの」

中尉さんがトエをなだめての帰り道、峠の例のガジマルの樹の下に来るときまって峠の下の部落からあやしい音色が耳にまつわりついてきて歩みをさまたげるのです。そしてこんな気持ちに誘いこんでしまうのです。それは——部落全体が青い沼の底に沈んで、部落の人びとの悲しみが凝り固まり呪いの叫びを挙げています。やがて嬾々とした一人の狂女の声音になって沼の底からメタンガスのようにぶつぶつふき出し、峠を越えて部落をのがれ行く青年をとらえて放さないのです。その歌声は長く長く緒をひいて今までのどんな音楽にもきいたことのないようなメロディなのであります。中尉さんは両手の指で固く耳にふたをして急ぎますが、その音色をきかないわけには行かなかつたのです。それはトエがはだしのまま浜辺にとび出してきて歌っているのにちがいないのです。加那やもう見えらぬ……と。

隼人少尉も眼がくぼんではじめました。隼人少尉は夜もおちおち眠れなくなりました。頭目が本当に頭目の部屋で寝ているかどうか気がかりなのです。頭目の部屋でことりと音がする度に隣の部屋では隼人少尉の眼が異様に光っていたのです。

しかし、やがてそんな心配はいらなくなりました。戦争の情況は全く行き着く所に来てしまったのです。